

*Paper*Back*Factory*

 Eassay

Column

Book Review



作家といふもの

数年末に刊行した本の巻末に、電話番号を掲載したことがある。生息地及び個体状況がイリオモテヤマネコ並みに不明な『読者』という生物を捕獲するためである。

かけてくるのは、ほぼ全員女性だ。

これは予想通りである。年齢は十代後半から三十代前半で、これもまた予想通りであった。意外だったのは、彼女達の礼儀正しさである。

まず深夜早朝という不謹慎な時間にかけてきた人はひとりもない。「今お話していいですか」と慎重に会話を始め、「また電話してもいいですか」と静かに受話器を置く。おまけに、私を『先生』と呼ぶような、どうでもいい社会常識まで持ちあわせている。

何より驚かされたのは、彼女達の作家に対する幻想だった。

「すごい。あたし、今、作家の人と電話してるんですね」

Essay

彼女達は必ずこういう発言をする。

「作家が、こんな昼間に電話なんかで喋ってていいんですか」
とやんわり詰問されたこともある。

彼女達の意識の中で、作家とは常に反社会的で奇人変人で、真昼に惰眠を貪り、深夜に締め切りに追われる身でなければならず、間違っても月曜と木曜の朝七時半にゴミ出しをするような人物であってはならないのである。

だから、ほんの十分ほど話すうちに彼女達の口からは「仁川さん」が飛び出し始め、一時間を過ぎる頃になると「あなた」とか「兄ちゃん」になっていたりする。

もはや作家ではなくなってしまった私は、そんな彼女達のちっともうまくいかない恋の話を聞きながら、作家というものに思いを巡らせて、だらだらと時間を過ごしている。

了

(文藝家協会ニュース一九九八年八月号に寄稿したものに加筆修正しました)

Essay

キミ、死に給うことなかれ

もっとも今日的に〈少女・十三歳〉を定義するならば、『エヴァンゲリオン』 マイナス1なオナのコになるだろう。年齢というものはこのようにどうしようもなく、且つどうでもいい事柄なのである。

さて社会一般が揉み手摺り手で定義するところの〈少女・十三歳〉は、中学生という存在になっている。オトナでもなくコドモでもないと言われて久しい中学生である。久しいのに世間の意識が何も変わらないのは、毎春中学生が次々と中学生ではなくなって、昨日まで小学生だった世代へと粛々と引き継がれていくからである。だから永遠に中学生はオトナでもコドモでもない存在のままでいる。

というのも平成の現在になってまで、オトナだのコドモだのと下らない線引きをしたがるのは、JRの券売機か、コドモのままオトナになってしまったデカルト以前なオトナ連中ぐらいなので、当の中学生は黙って制服を着せられ

Essay

て、毎日学校という建物に通い、だらだらと部活をやり過ごし、試験に囲い込まれ、つまらなさそうな顔をして歩いている。

教師のように成績や校則を武器に大っぴらにセクハラを楽しむことも出来ず、煙草もアルコールも禁止され、遅刻は咎められ、普通免許も持てない。中学生の癖にと蔑まれ、中学生なんだからと叱られる。

昔々、日本人はある日突然隠し処から生まれ落ちてくるコドモという生き物をかなり胡散臭く見ていて、裳着や袴着を経なければヒトとは認めなかったし、七歳までは神のうちなどと言い放って、その不気味なまでの存在の曖昧さを呪いながら尊んできた。未だそのDNAを隠し持っている日本社会で、オトナでもコドモでもない中学生をやっていくことはなかなか大変だろう。

にもかかわらず一方では思春期などともてはやされたりもする。その思春期の春は、啓蟄の春というよりむしろ売春の春の匂いが濃い。しかも春は桜に代表されるように一方的にオトナに愛でられるためにだけ存在しなければならないので、中学生である〈少女・十三歳〉も例外ではない。

恋をするのはいい。恋は精神世界を顕著に発達させるのだ。しかし恋の先にある、種の行動は許されていない。経済的に独立していない個体は、勝手気ままに細胞を分裂させてはならないのである。けれどそこには抜け道があって、〈少女・十三歳〉の相手がオトナならば〈少女・十三歳〉は〈少女・十三歳〉だからこそ価値が高く、闇取引も派手になる。

中学生になって、もはやオトナでもコドモでもなくなってしまった少女は、制服というものに集団化されて、逆に裸に剥かれる。オトナは少女の中にメスを嗅ぐことに血が滾るほどの喜びを感じるので、血眼になって痕跡をたどり、完膚無きまでの蹂躪の夢に心を躍らせる。

もちろん〈少女・十三歳〉にはオトナの欲望は理解できない。かつてオトナだったことはないし、オトナのように欲望を肯定して生きることを禁じられているからだ。〈少女・十三歳〉の中には「選ばれる自分」という意識はあっても、奪われたり襲われたりするメス意識はない。〈少女・十三歳〉が知っているのはオンナの口で、それはかわいくて好かれる生き物だ。それでも発毛だの

乳房だのという極端に個人的な事柄を総体として捕捉されることを「なんとなく、イヤ」だとは感じる。感じるけれど深く考えることはしない。

考えることは「かわいくない」と教えられ育てられてきた。「かわいい教」からの脱走はすなわちオナナの口としての即死を意味するので、そんな恐ろしいことは尚更考えない。そして〈少女・十三歳〉はますますメスに陥ってゆく。

思春期になってしまった〈少女・十三歳〉が何よりも恐れなければならないことは、メスとしての死である。頭の中がオス細胞で一杯になったオトナの社会では、生命としての死よりも、メスとしての価値ある死こそが何よりも重大なこととされる。

元々、オナナの口は女として生まれてしまったがゆえに、いつでもどこでもどんなときでも殺される危険と隣り合わせに成長することを強られる。

かわいいからと殺され、ぐずるからと殺され、裸が見たかったからと殺される。生まれる前から、オナナの口は要らないからと殺されることもある。恨み

も辛みも生来の所業とも全く無関係なところで、オンナの口はどんどん殺される。その身体的特徴のために今日もどこかでオンナの口は殺されている。

大きくなってもオンナの口は殺される。幸福そうだから、ただ憎かったから、別れ話がつれたから。

オンナの口は無事成長しても油断大敵火の用心なのである。交際しているカレはいつ豹変するかしれないし、通勤に疲れている夫が今夜突然殴る蹴るを始めるかもしれない。何気なく街を歩いていても、見ず知らずのオトナがいきなり包丁で襲いかかってくることもある。

それはつまり、オンナの口は殺されてもいい生き物としてオトナに定義されているからだ。オンナの口はオンナの口であるだけで、誰にどんな殺され方をしても仕方がない玩具ということになっている。もちろんそれはオンナの口がかわいいからなのだが、かわいいということは馬鹿にしても構わないということになっているから、とにかくオンナの口は殺される。

少しばかりやんちゃな遊びをしていて殺されてしまったオンナの口の場合、

Essay

犯罪者よりもひどい扱いを受けるのがオトナの社会の通例である。暗にその犯罪を唆したと評されるのだ。まるでそのオナのコが存在したばかりに加害者は犯罪者になってしまった、加害者こそ被害者だと言わんばかりのすり替えのメッセージが手を替え品を替え、一斉に垂れ流される。

何もかも全ての元凶はオナのコ、すなわちその下半身なのである。そうしておけばオトナは安心で安全で清潔なのである。

こんなオトナに監視されながら、お年頃になりつつある〈少女・十三歳〉はオトナでもコドモでもないのに、身体はオトナであると扱われるから、生命よりも大事にしなければならないモノを持っていることにさせられてしまう。そして時折、〈少女・十三歳〉がその生命より大事なモノをなくす衝撃の瞬間が表沙汰になる。

この衝撃の瞬間は、どうやら最近は中学生の専売特許になっている。高校生は勝手に売春をするほど合理的且つ社会的な生き物になってしまったし、ランドセルを背負う小学生はコドモで、まだ早過ぎるのだ。だから中学生こそが最

適なのである。

誘拐されて拉致されて監禁されて暴行されていたずらされて、〈少女・十三歳〉はもはやコドモではないから、間違いなく生命より大事なモノを奪われたメスとして、社会に認知される。生きて還っても真実殺されていても、オンナのコはすでに死んでいる。オトナは一見物分かりのいい態度を見せながら、頭の中では密室で行われた血の儀式の細目に異常に興奮して、暗黙の了解を示し合う。そして断罪する。あのオンナのコはもう「商品」にはならない。

残念なことに、こんなオトナにつける薬はない。ただひたすら一日も早く死に絶えてくれることを祈るしかない。どんなときにも時間は後から来たものに味方する。それを知ってか知らずか、コドモたちはかつてオトナが見たことも聞いたこともない生き物に成長しつつある。

ヒトをオスカメスカに区別することを究極のデジタル化だと思い込んでいるオトナとは反対に、コドモはオスにもメスにもなろうとはしなくなった。子供の数が減って家庭の中での男女の区別がなくなったからか、出席簿が男女混合

になったからか、マクドナルドがバリューセットを始めたからか、理由なんか学者が考えればいいのだが、とにかくいかにもオンナのコ然としたオンナのコの姿を見かけなくなった。ただ存在しているだけでかわいいオンナのコは消えてしまった。

親というオトナが十分に手を掛けているはずの小学生の頃から、オンナのコは少なくなっている。特に著しいのは高校生だ。見事に第二次性徴を遂げた代表者として扱われる高校生のあの姿に「かわいい」を投げかける勇気があるのは当の高校生だけだろう。そして模倣は学習の第一歩なので、今やどんな地方都市にもあの高校生がいる。高校生であるのかどうかも不明だが、あの高校生たちはどこにでも生息している。冷蔵庫の裏にだっているかもしれない。

もちろん、あの高校生にならなかった高校生もいる。かつては保守中道路線の代表だった彼女達は、昔とは違う保守中道路線を築いている。それが保守中道と名付けられていたことさえ知らない路線にいて、青春ではなくてすでに人生を通過している。そんな高校生も、パートで高校生をする売春婦も、不思議

なことになぜかちっとも生臭くない。体温すら感じられない。密度は異様に高いのに、景色が透けて見えそうなのだ。

メスではないからだ。もちろんオスでもない。そしてオスでもメスでもないことに焦りも疑問もなく、オトナの押しつけにも知らん顔でいる。専業主婦と売春婦の違いを「愛」という単語でしか説明できないオトナは合理的ではないから、高校生にはどんな説得力も持たない。これはとても小気味いい現象であり、また非常に難しい現状でもある。

オンナの口はただオンナの口であるから黙って殺されてきたように、じっと待っていればいい生き物だった。上を向いて、天からぼろぼろ降ってくるものを有り難く受け止めていればよかった。オトナがそう決めたのだ。

昔、情というもののしかなかった頃には名前しか知らない男が主人として落ちてきたし、淡い恋とやらは雲間に浮かんだその人を見上げるだけだったし、男女平等の現代社会には雇用機会均等法と育児休暇の檻が投げ落とされた。どっちにしても、ひたすら待っていれば済んだ。

Essay

それはオンナのコがオトナが望んだメスにきちんと成長したことへの、いわゆる御褒美だ。でもこれは見事に死んだことへのご褒美なのだ。オンナのコが立派にオンナのコとして死んでメスになったとき、オトナはその死を称えて、ほんのわずかな糧を与える。

生かさぬように殺さぬように。

しかしメスではない高校生は、オトナに刃向かうけれど、待ちの姿勢は崩さない。かつてのオンナのコと同じように、ひたすら上を向いて、ぽかんと二つの口を空けて、待っている。お金がほしいからどんどん小利口にはなるけれど、決して賢明にはならない。賢明であることは、懸命であることとは違って、オトナの社会では何よりも不都合であることを肌で知っているからだ。結局、このオンナのコらしからぬオンナのコも、死んでいることに変わりはない。ただ少しばかりその死に様が派手なので耳目を集めるけれど、昔あった刑事ドラマの殉職シーンと同じで、いずれ若者の生態の一つとして片付けられて終わることだろう。

Essay

〈少女・十三歳〉はオトナでもコドモでもなく、年齢的にも社会的にもオスでもメスでもない。後に残ったものが個性であれ、没個性であれ、〈少女・十三歳〉には選択の余地がある。まだ生きているのだから。彼女達にはどんな定義もなされてはいない。中学生であること以外、自由なのだ。生命より大事なモノを持たされているとはいえ、それをどう使うかは結局持つ者の自由意思だ。死ぬも生きるもキミ次第、なのである。

だから、出来ることなら物の見事にオトナの目を欺いたオンナの口として、なにがなんでも生き続けて欲しい。もちろんその道程は困難を究めるだろう。

〈少女・十三歳〉の周囲には至る所に義理の父や近所のおじさんや変質者や教師の目があり、オトナは巧妙に制服をむしり取る口実を考える。スクール水着だって危険この上ない。安全なはずのカレシも決して万全とはいえない。日本にはコントロールという意味の性教育はないし、あったとしてもオンナの口にしか施されていないからだ。オトナはいつでも簡単に発情できて、しかもそれが大っぴらに許される、とても便利な生き物なのだ。だからこそ悪いのはいつ

だってオンナのコだ。

テレビや映画もなかなか油断ならないジャンルだ。少し気を許していると、オンナのコはあっちでもこっちでも、ぽいとひっくり返されてカエルのように強姦されている。日本はゴールデンタイムだろうが深夜番組だろうが、平気でお茶の間に強姦をお届けする番組構成なので、一度も目にすることなくオトナになるのは不可能だろう。特に、セーラー服姿できゃぴきゃぴかわいくしているオンナのコが出ているドラマは要注意だ。そのオンナのコがかわいければかわいいほど、視聴率のための強姦要員である可能性が高い。

このような不愉快な事象に満ちた日常を無傷で乗り切るのはまず無理だろう。耐性という抵抗力を養わなければならない。たとえどんなに突然に衝撃の死の瞬間がやってきても、決して死ななければいいのだ。オトナの決めた死に殉じる必要はない。平気で笑って、生きて堂々と還ってくればいい。そのためには、ただ上を向いてひたすら口を空けて待つオンナのコではいけない。今一体何が欲しいのか、きちんと把握していなければならない。欲しいものを手を

Essay

伸ばしてかすめ取るオナのコであるべきだ。たとえお金のために、シャネルのためにベッドで待つ状況になっても、ただ待たないでそれを楽しむオナのコであってほしい。

オナのコはオナのコであるために、オトナにいじくり回され、玩具にされ、半人前に扱われる。そして身体的発育だけが問題視される。だからこそ、下半身が未分化未発達であることを望まれるのである。

だったら虫も殺さぬ顔をして、オトナの欲望を楽しむオナのコになればいい。オスでもメスでもない生き物でも、自分の欲望を楽しむことはできる。つがう前に、何がどのようにどうなっているのかを丹念に実習することは決して不利益にはつながらない。

だからまず手を伸ばして身体を確かめて、抗菌コートされていない部分がそこにちゃんとあることを認識して、メスでなくても欲望が存在することを実験してほしい。そのくせ「早く赤ちゃんが産みたいの」なんて赤面して言えない中学生こそ望ましい。ただぽかんと待つだけでなく、欲望を真面目に楽しむこ

とを覚えて、きちんと一人前にマスターベーションができるかわいいオナのコになってほしい。そして街角でもベッドでも決して死なないオナのコであり続けてほしい。口走るだけならいいけどね。〈少女・十三歳〉に望むのはこんなことぐらいである。

了

（早稲田文学一九九七年七月号VOL 22-2 に寄稿したものに加筆修正しました）

Essay

エッセイ

「キミ、死に給うことなかれ」他1編



2001年7月29日 Ver1.0.0

著 者	仁川高丸
発行所	Paper*Back*Factory http://paper.honesto.net/ paper@honesto.net
P D F	Adobe Acrobat 4.0

© Takamaru Nigawa 2001

購読者本人が楽しむ目的以外の印刷と、
一切の複写、複製、貸与を禁止します。

Essay